

# 宮古島西原の祭祀用具について

上原孝三

## 1, はじめに

沖縄県宮古島市平良字西原(福山は行政上は西原であるが、福山は含めない。)には、年間約50の村落レベル祭祀があるとされている。西原には村落レベル祭祀の他に、支部レベル、里レベルの祭祀が行われる。かつては祭祀を支えるナナムイヌンマ(七杜の母)も数多くいたが、現在では祭祀を実施する神女が減少し、祭祀存続の危機が叫ばれている。

祭祀を支えるナナムイヌンマは減ったが、神へ供える供物の数・量が減少したわけではない。基本的には分量には変化がみられない。供物を供える際、カンブン(神盆。木製のお膳のようなもの)やバカシイ(沸かし。陶器製の器)と称される祭祀用具が用いられる。また供物を盛る際に芭蕉の葉なども用いられる。それらの用具・器具を、本稿では統一して「祭祀用具」として用いることにする。

祭祀用具は原則として年中行事で用いられるが、必要に応じ臨時の祈願、あるいは個人の祝い(結婚祝い)にも用いられる。年中行事では男性が用いる用具と女性が用いるそれがあるが、西原の場合、祭祀用具のほとんどを女性が用いる。従って、本稿で述べる祭祀用具は村落レベル祭祀で用いられ、かつ女性が用いるものに限り、それについて触れたい。

祭祀用具は祭祀時などに使用し、日常生活の中では原則として用いない。祭祀用具がどのような祭りで、いつ・どこで用いられるかは祭祀の担い手・神役が知っており、神役あるいは神役経験者以外の者には、たとえば何がいくつあるのか、その実状は知られていない。

村人も村落祭祀には関心を持っているが、祭祀用具には取り立てて興味を示さない。それは知らなくとも不都合はないものとして意識されている。

祭祀用具は大切に取り扱い、通常西原の最高神女役であるウーンマ(大母)の家で保管される。ウーンマの住んでいる家(嫁ぎ先)を通称ウーンマヤー(大

母家)と呼ぶ。ウーンマは祭祀用具を保管するにあたり、自宅の屋内に棚を設置するか、あるいは屋敷内に簡単な倉庫を造る。当然のことながら、ウーンマといえども個人的に部落の祭祀用具を借用しないし、村落祭祀以外には用いない。祭祀用具はウーンマ在任中の部落からの「一時預かり品」という形になっているが、ウーンマにはそのような意識はなく大切に保管する。もし、祭祀用具が盗難にあったり、遺失すれば、宗教的な威厳の失墜に繋がり、ウーンマ個人だけでなく、家族の不名誉にもなるからである。

だが、平成22年度のウーンマの場合は自宅に設置しなかった。彼女はウーンマになる以前から西原で生活をしてなく、市内にあるアパートを生活の拠点にし、祭祀がある毎に西原に通ってきた（ウーンマ役ではなかったが、彼女以外にも20年ほど前にそのような人が1人いた）。

従って、アパートでは用具を置くスペース上の問題があり、さらに用具を置いたにせよ西原への持ち運びに苦勞する上、破損の怖れもあるとし、用具類の多くをブンミヤー（旧公民館。館内の右側奥）に保管していた。用具類の多くをウーンマの自宅ではなく、ブンミヤーに置くのは初めてのケースだという。西原の人々の意識は、用具の置き場所の問題はさしおいても、祭祀を継続する方向を選択したのであった。

西原の旧公民館には、常時保管される祭祀用具として、ヒューイ（日撰り）やミュークジイチイ（宮古節）などに用いるカミ（瓶）が3個ある。また、数枚の筵もある。これらは、字長の管理となる。それらは公民館内入り口右側に保管されているが、瓶はロープで固定され、瓶と瓶の間には車のタイヤが挟まれ、地震でも瓶が割れないよう対策が施されている。

現在、祭祀用具は大母家から自家用車で御嶽の入り口まで運搬している。これはUさんがウーンマの代（20年前程）から始めた。車で運ぶ以前は、祭祀日にハナムマ（上の母）は大母の家に集まり、祭祀用具の点検を行い祭祀に用いる用具を準備し、それをマグに詰め、御嶽まで頭上運搬をしていた。ウーンマヌトゥム（大母の供）とアークシィンマヌトゥム（歌を謡う者の供）二人が実際マグを担うわけだが、重いのでいささか難渋した。

頭上運搬から車での運搬。この変化の背景には従来の社会基盤の崩壊とそれに伴う社会生活の変化があった。運搬上の従来からのしきたりを変えるにあたり、

神への詫び願いと許可願いを神役5人が行った。理由の一つは、車社会だから車を用いない手はないということ。もう一つは、祭祀用具を運ぶ負担を取り除くことであった。さらに、いまひとつ危険を未然に防ぐためであった。

つまり、頭上運搬は生活習慣としてもなくなり、頭上運搬をした際、つまずいたり転んだりする危険が常にまわりついていたのである。もしも運搬者がつまずいたり転んだりし、祭祀用具を破損・損壊した場合、祭祀が行えないという事態が生じる上に、ハナヌンマ全員が神へのワビニガイ（詫び願い）と、転んだ人が個人的にタシキニガイ（助け願い）を行わねばならない。このように二重三重に厄介なことも生じてしまう可能性があることから、従来の運搬方法を改め自家用車で御嶽の入り口まで運搬している。御嶽の入り口から、御嶽の中までは従来の頭上運搬方法に従っている。

運搬方法を改めるにあたり、ハナヌンマ（上の母）5人は、他集落のムヌシー（物知り）を訪ね相談した。第三者を通じての神の意志の確認である。時代情勢の変化、現代化への適用、さらに改変にあたり西原の村落内での反対の意見もなく、祭祀用具の車での運搬は認められた。

それに伴い、ハナヌンマ5人は神への詫び願いと許可願いを行った。つまり、神への確認と神からの許可という手続きを取ったのである。女性祭祀集団・ナナムイへの加入者が激減している現在、車での運搬・搬入は祭祀を行う者にとっては大変ありがたい手段になっている。

祭祀用具は前代のウーンマから次代のそれへと受け継がれる。それは新旧のウーンマの交代がなされる旧正月の数日前に行われる。しかし、祭祀用具の目録（記録）はなく、前代のウーンマから次代のそれへ、旧正月前に引き継がれるだけである。破損した祭祀用具があっても捨てることはせず、引き継いだ。破損し利用られない用具はそのままだが、新しい用具類は部落の予算で補充する。従って、用具は増える一方になる。破損していても、いつ・どこで・誰が・どのよう

に処分すればいいのか判断できない状態が続いていたのである。

平成18年度から平成21年度までの4年間ウーンマを勤めた方の言に拠れば、引き継いだ器具類には破損のものも含まれていた。使用できない物を保管しても意味をなさないとして、処理した。その際、他集落の民間の霊的職能者であるムヌシー（物知り）に相談し、ブンミャーの後方に穴を掘り埋めた。祈願は御嶽で

行うような正式な手続きに乗っ取り行った。つまり、祭祀用具に細心の注意を払っているのは、神の器具だという観念が働いているからである。

祭祀を実施するのは、神役（本来は5人）が主導するが、5人中ウーンマ、アークシィンマ、ナカバイの3人は、それぞれの任期終了後半年以内に、神役解除儀礼を自宅で行う。解除儀礼は、現役的神役に依頼するが、これは祭祀用具であるカン（神）のブン（盆）を抱いた（触った）からだという。つまり、ウーンマ、アークシィンマ、ナカバイの3人には、神霊が宿っていると意識されている。神霊の力で人間のタマシィ（魂）が弱るから、解除儀礼を行わないと、その神役が死んでしまうと考えられているのである。祭祀用具は単なる用具ではなく、そのような神霊の力が宿っている。

祭祀用具の多くを實際手にするのは、神役（本来は5人）であるので、神役について概説したい。

## 2, 西原の女性神役について

神行事を担うのは多くは女性祭祀者である。祭祀儀礼を執行するには、その核・中心となる神役の選出・選定は必要である。西原では年間約50の村落祭祀があるが、それらの祭祀で主導的な役割を果たすのが、ナナムイヌンマ（七柱の母）から選出されたハナヌパー（上の母。ハナムンマ／上の母ともいう）である。即ち、フヂイカサ、アークシィンマ、ナカヂイカサ、フヂイカサヌトゥム、アークシィンマトゥムの5人である。以下、神役の名称・職能・任期・人員を概説する。

### 《女性神役》

【フヂイカサ】大司。通称ウーンマ（大母）。最高神女。村落祭祀における中心的な神役である。祭祀儀礼を執行する際に主祭者としての役割を担う。任期3～5年。1人。

【アークシィンマ】歌を謡う母。カンカカリヤ（神懸かる者）、サシィ（佐司）、アークシャー（歌を謡う者）、ムヌシィー（物知り）、など多くの名称を持つが、現在はアークシィンマと呼ばれるほうが多い。

この神役はかつては村落内の霊的職能者ムヌシィーから選出していた。神懸かりがが専門であり、祭祀儀礼執行中神懸かり状態になり、カンガカイヌ

アーク（神懸かりの歌）を謡った。それ故アークシンマ・アークシャーと呼ばれたのである。

線香の燃え具合から吉凶の占いをするのもこの神役の仕事の一つとされる。任期3～5年。1人。

【ナカディカサ】中司。通称ナカバイ（中栄え）。カンニガイ（神願い）の時、神えの供物が過不足がないように準備し供える役目をする。中司はフディカサ、アークシンマの補佐もする。また、フディカサヌトゥム・アークシンマヌトゥムと一緒に行動し、祭祀儀礼がスムーズに行えるよう諸雑務をこなしたり、様々な手続きをこなす。任期終了の半年以内にナカバイニガイ（中栄え願い）を行う。任期1年。1人。

【フディカサヌトゥム】大司の供。ウーンマヌトゥム（大母の供）ともいう。ナカディカサ・アークシンマトウムとともにこの3役はトゥムンマ（供母）とも称される。ナカディカサ、アークシンマトウムと一緒に踊ったり、祭祀儀礼がスムーズに行えるよう諸雑務をこなしたりする。フディカサの送り迎えも行う。任期1年。1人。

【アークシンマヌトゥム】歌を謡う母の供。ナカディカサ、フディカサヌトゥムと一緒に踊ったり、祭祀儀礼がスムーズに行えるよう諸雑務をこなしたりする。また、アークシンマの送り迎えも行う。任期1年。1人。

本来上記の5人の神役が、それぞれの役割に応じ、祭祀用具を準備したり供えていたが、2011年現在、ナナムイヌンマ（七柱の母）の数が4人であり、神役もウーンマとアークシンマの2人だけであり、この両人が元来のトゥム（3人）の担当分まで代行するようになっている。

### 3, 祭祀に用いる公的な祭祀用具

「公的な祭祀用具」とは、村落レベルの祭祀で用いる祭祀用具の事である。祭祀用具は、欠損・罅がはいるのはよくないとされなるべく用いないようにする。用具が不足、あるいは破損した場合などは部落の予算で補う。

以下、祭祀用具につき、名称・個数・所有者・運搬方法について述べたい。

① カンブン（神盆）

木製。3個。祭祀時にウーンマ・アーグシィンマ・ナカバイが用いる。カンブンは、祭祀に必要な欠くべからざる用具で、祭祀中はナカバイの担当管理。カンブンとは言わないが、その他にブンが13個ある。

ウーンマとナカバイはブンユ・ダチィ（盆を抱く）ともいい、カン（神）を抱くことになる。即ち、カンブンは神の神聖・霊力が宿るものと認識されている。ウーンマとナカバイは任期終了後、霊力解除の儀礼を行う。神の神聖さ・霊力が人体に影響を及ぼし、人体を衰弱させると考えているからである。

② ムッス（菴） 2枚。1枚にはカンブンを置き、他の1枚にはハナヌンマが座る。菴を敷くのは、ウーンマストゥム・アーガシィンマストゥムの2人の担当となる。

③ ヒモ（紐） ムッス（菴）を畳み、その上にカンブンを置き、紐で結びナカバイが頭に乗せる。カンブン・ムッス・紐はセットとして、旧暦12月のカーヌカンニガイ（井戸・湧泉の願い）に、ヤマジャトウガー（山里井戸）で現役のナカバイから次代のナカバイへ渡す。ナナムイヌンマはその行為を「ハナタバ贈呈」と呼んでいる。ハナ（カンブン・ムッス）を紐でタバ（束）ねたからハナタバ贈呈なのである。花束と掛けている。

④ ッスカニビン（白銀瓶）

金属製。4本。ッスカニは白銀の意。しかし、銀で造られているわけではない。ビン（瓶）と称しているが金属の祭祀器具であり、サキ（酒。泡盛）を入れる器。カンブンの上隅に左右1本ずつ置かれる。

⑤ サカディチィ（盃） ダイサカディチィ（台盃）ともいう。酒を入れる器。陶器製。ダイ（台）に二個置かれる。因みに、池間島では3個置かれ、それぞれ太陽・月・人間を象徴する。

⑥ ダイ（台） サカディチィ（盃）を置くもので木製。基本的に1つのカンブんに1つ置く。ロクガチィニガイ（6月願い）のように供物が多い場合にはダイは金属製も用い、やはりカンブんに1つ置く。

⑦ バカシィ（沸かし） 酒を入れる容器。陶製。2個。現在祭祀に用いる酒

は、泡盛りであるが、かつては麦・粟・芋などを嚙んで唾液とともに発酵させた。バカシイに入れる神酒は完成品であろうと思われる。マグに入れて運ぶ際には割れないようにサジイ（タオル）などで巻く。

- ⑧ ナカジュフー（中造り） 酒を入れる容器。陶製。1個。マグに入れて運ぶ際には割れないようにサジイ（タオル）などで巻く。ナカジュフー（中造り）には神酒を入れるが（現在は泡盛）、神酒の完成品ではなく、発酵中の神酒を入れた。
- ⑨ カミガマ（小さい瓶） 酒を入れる容器。高さ4センチほどで陶製。カンブンの左右に置く。通常左右に7個ずつ配置される。ロクガチニガイ（六月願い）やブンミャーヌウフユダミニガイ（公民館の大世の為の願い）などで使用する。
- ⑩ チューカ（急須） 酒を入れる手のついた金属製の急須。本来はお茶をいれる用具だが、酒をいれて用いている。チューカ（急須）から、ツスカニビン（白銀瓶）やバカシイに酒を入れる。サカヂイチイ（盃）にはツスカニビン（白銀瓶）より酒を入れるのが通例。
- ⑪ マグ 2個。茅で編んだ祭祀用具を運ぶもの。形状は台形型であり、上辺は直径80センチ程。ウーンマヌトイム・アーグシインマヌトウムが、④～⑨までの祭祀用具をマグ二つに分配し頭上運搬する。マグは、御嶽によって置く場所が決まっている。旧暦9月のユークイ（世乞い）祭には、ゆー（世、幸）が天上よりマグに下りるといふ。
- ⑫ ジュウバク（重箱） 木製。餅・蛸などの供物を盛る箱形の容器。カンブンの下方や横に置かれる。ロクガチニガイ（六月願い）やブンミャーヌウフユダミニガイ（公民館の大世の為の願い）などで使用する
- ⑬ トゥーイ（灯り） 石油を燃料としたガラス張り立方体の照明用具。ランプ。3個。御嶽に籠もる場合、ウドゥヌ（御殿）の前方と真中と後方に吊す。ウドゥヌ（御殿）には電気の照明器具はないので、ウーンマヌトゥーイ（大母の灯り）とトゥーイ（灯り）が灯りとなる。
- ⑭ ウーンマヌトゥーイ（大母の灯り） 石油を燃料とした障子張り立方体の照明用具。1個。ウーンマが個人的に造る。御嶽に籠もる際に持参する。ま

た、ウーンマヤー（大母家）で行われる麦・粟（現在は米のミキ）・芋（芋ミキ）の各ウパチイ祭や、ウーンマヌトウシイヌバン（大母の年の願い）の祈願時にも灯される。

- ⑮ フジャラ（大皿） 木製の器。2個。大皿の中にはンチイ（神酒）が約一升入る。ウパチイ祭や、ウーンマヌトウシイヌバンには、ウーンマとナカバイは神酒を入れたい大皿をそれぞれ膝の上に乗せ、「フジャラ（大皿）」の歌を謡う。しばらく休憩し、「ウヤキナカジャラ（富貴中皿）」を謡う。
- ⑯ ナカジャラ（中皿） ンチイ（神酒）を盛る器。椀のこと。漆を塗った半球形の木製の容器。48個。ウパチイ祭や、ウーンマヌトウシイヌバンには、ウーンマとナカバイは神酒を入れたい大皿をそれぞれ膝の上に乗せ、「フジャラ（大皿）」の歌を謡う。「ウヤキナカジャラ（富貴中皿）」の際にも同様。
- ⑰ マイサン（語義未詳） ンチイ（神酒）を入れる陶器。瓶の名称。御嶽で用いる瓶と家で用いる瓶があり、名称は同じだが形状が異なる。各1個ずつ。ウパチイ祭や、ウーンマヌトウシイヌバンの儀礼終了時に御嶽とウーンマ家で供えられる。
- ⑱ バカシイ（沸かし） ンチイ（神酒）を入れる陶器。瓶の名称。御嶽で用いる瓶と家で用いる瓶があり、名称は同じだが形状が異なる。各1個ずつ。ウーンマ家でのウパチイ祭や、ウーンマヌトウシイヌバンの儀礼時に用いる神酒の入れ替え用としての瓶が、御嶽のそれより大きい。
- ⑲ ナカジュフー（中造り） ンチイ（神酒）を入れる陶器。瓶の名称。御嶽で用いる瓶と家で用いる瓶があり、名称は同じだが形状が異なる。各1個ずつ。ウーンマ家でのウパチイ祭や、ウーンマヌトウシイヌバンの儀礼時に用いる神酒の入れ替え用としての瓶が、御嶽のそれより大きい。
- ⑳ チャバン（湯飲み茶碗） ユーグムイ（夜籠もり）の際、お茶を飲むに用いる。陶器。市販のもの。
- ㉑ チイギカエ（注ぎ替え） ンチイ（神酒）を入れる陶器。瓶の名称。ウーンマ家でのウパチイ祭や、ウーンマヌトウシイヌバンの儀礼時に用いる神酒の注ぎ替え用の瓶。
- ㉒ カミ（瓶） ンチイ（神酒）や酒を入れる陶器。瓶の名称。3個。ヒューイ

に米神酒をミヤークヂイチイには酒を入れる。旧公民館に保管する。

- ⑳ スイトー（水筒） ウーンマ、アークシィンマ、ナカバイなどが掃除や線香をセッティングした際に用いる。金属製。手洗いは、線香を燃やすシィン辺りで行う。火を消化する目的もある。
- ㉑ スコップ カウ（線香）をセッティングするにシィン（砂）に少々埋める。燃えた線香の残りをかたづけるにあたり用いる。また新たな砂も運ぶ。かつてはニグー（シャコ貝）をスコップとして用いていた。シャコ貝は、ウイディンマ（初出母）の供出物。旧暦12月トゥマイガンニガイ（泊まり神願い）に、真謝港の砂浜に予め埋めてあったものを取り、大主御嶽に持っていく。

シャコ貝はかつて灰皿あるいはスコップの代用としても用いていた。
- ㉒ カウル 各御嶽にカウル（香炉）がある。祭祀実施上大切な用具。陶器。御嶽に常備されている。
- ㉓ シィン（砂） カウ（線香）をセッティングするに砂に少々埋めるために必要とされる。御嶽では砂のことをシィン（語義未詳）という。部落で準備する。
- ㉔ アカガミ（赤瓶） ンチイ（神酒）を入れる赤い色の陶器。瓶の名称。
- ㉕ シンメーナビ（4枚鍋） ウーンマヌトゥシィヌバン（大母の年願い）などウーンマの家で行われる祭祀を行う祭に、昼ご飯のおかずや豚肉を煮込むための鍋。
- ㉖ タライ 大きなタライはンチイ（神酒）を冷やすための器具。中・小のタライは公民館で祭祀を行う祭に、カウル代用として用いる。
- ㉗ スクジイー（鋸） 御嶽の掃除を行うときに、木の伐採に用いる。
- ㉘ ヅザラ（鎌） 鋸同様御嶽の掃除を行うときに、木の伐採・草刈りに用いる。

上記に述べた祭祀用具を表にまとめると以下のようになる。

	個数	部落所有	個人所有	運搬方法	備考
①カンブン(神盆)	3	○		ナカバイの頭上	
ブン(盆)	13	○			
②ムッス(蕙)	2	○		ナカバイの頭上	
③ひも(紐) (特別な名称なし)	1	○		ナカバイの頭上	
④ッスカニビン (白金瓶)	4	○		マグに詰め、頭上。	
⑤サカヂイチイ(盃)	26	○		マグに詰め、頭上。	
⑥ダイサカヂイチイ (台杯)	2	○		マグに詰め、頭上。	
⑦バカシイ (沸かし。御嶽)	1	○		マグに詰め、頭上。	
⑧ナカジュフー (中造り。御嶽)	1	○		マグに詰め、頭上。	
⑨カミガマ(瓶小)	91	○		マグに詰め、頭上。	
⑩チューカ(急須)	3	○		マグに詰め、頭上。	
⑪マグ	2	○		トゥム二人の頭上。	
⑫ジュウバク(重箱)	18	○		手に持つ	
⑬トゥーイ(灯り)	3	○		手に持つ	
⑭ウーンマヌトゥー イ(大母の灯り)	1		○	手に持つ	
⑮フジャラ(大皿)	2	○		マグに詰め、頭上。	
⑯ナカジャラ(中皿)	48	○		同上。	
⑰マイサン(御嶽)	1	○		同上。	
マイサン(家)	1	○			
⑱バカス(家)	1	○			
⑲ナカジュフー(家)	1	○			
⑳チャバン (湯飲み茶碗)	30	○			

	個数	部落所有	個人所有	運搬方法	備考
㉑チイギカエ (注ぎ替え)	1	○			
㉒カミ(瓶)	3	○			
㉓水筒	2	○			
㉔スコップ	2	○			
㉕カウ(線香)	必要に 応じ		○		
㉖シン(砂)	必要に 応じ	○			
㉗アカガミ(大)	3	○			
アカガミ(少)	1	○			
㉘シンメーナビ (四枚鍋)	1	○			
㉙タライ(大)	7	○			
タライ(中)	5	○			
タライ(少)	1	○			
㉚スクジュー(鋸)	3	○			
㉛ツザラ(鎌)	5	○			
㉜フロシキ(風呂敷)	5	○			

#### 4、 個人的に用いる祭祀用具

- ① カウ(香。線香) 家族の人数分と御嶽の神柱の数を家で準備し、御嶽で提出する。神願いには欠かせない。
- ② ッティー(煙管) ナナムイに加入する前に購入する。煙管には市販の煙草を入れる布製の袋をつける。
- ③ タバク(煙草) 御嶽では煙草のことをンマンナカという。ンマは美味しいの意。ンナカは真ん中の意と思われる。祈願の儀礼を開始する前に、煙管に詰め吸う。これをタバクユーイ(煙草祝い)・ンマンナカユーイと称す。煙草が吸えない人は、煙草を吸うまねでもよい。煙草には必ず火を付ける。

- ④ カーシィ・アマダマ（お菓子・飴玉） お菓子・飴玉などは個人の好みで持参する。神願い終了後、お互いにお菓子・飴玉を交換し合い食べる。相手があげますと言うに断るのは失礼とされる。御嶽に供えるお菓子は、神へのチャウキ（茶受け）とされる。祭祀終了後カバンの持ち帰る分の菓子は、カバンの分として家の火の神などに供える。
- ⑤ バッグ 上記の個人的な荷物を入れる。マッチ・ライターなども入れる。かつての風呂敷の代用品。
- ⑥ カッパ（雨合羽） 儀礼の最中に雨が降った時に備え、常時携帯している。祭祀儀礼は雨で一時中断することはあるが、祭祀そのものを中断することはない。台風の中でも雨合羽を着し、祭祀を行ったことがある。
- ⑦ チャウミン（帳面） ノートのこと。 ナナムイヌンマは祭祀ごとに各自ノートを持ち参加する。ノートにはユージュムイ等に謡う歌謡を書いてあり、歌詞を覚えていない場合あるいは歌詞がうろ覚えの際に参考に見ている。

5人のハナムンマのノートには儀礼に用いる供物の数や盆の配置などが書いてある。ノートは実母や先輩あるいは先代の神役から借りて写す。ノートはナナムイ終了後も大切に保管している。当人の死後、ノートは棺桶に入れることはせず、家族の保管に委ねられる。

記録・防備用のノートは西原のみならず、宮古各地の神役などは大抵各自用のそれを持っている。ただ、神事に関する記録なので大抵の場合は公表しない。
- ⑧ その他 お茶や水のペットボトルや栄養ドリンクなど好みのものを持参する。

## 5. 最後に

西原のナナムイヌンマ（七杜の母）は現在（2011年）4人である。祭祀集団ナナムイへの加入者は年々減り続けている。神役は形式上存在するが、新加入者が現れない限り、神女組織は崩壊することは目に見えている。従って、いつまで祭祀を継続できるかが西原の大きな問題であり、課題にもなっている。有効な打開策もなく、現在に至っている。

祭祀に用いられる用具は、祭祀が途絶えたとどうなるのか。おそらく、村（公民館）で保管することになるだろう。神に対して用いられたものなので、誰も積極的に処分することはない。神の崇りを恐れるからである。つまり、祭祀用具には神霊が宿っているという観念が人々意識の根底にも存在する。

個人的に用いた祭祀用具は、本人がナナムイヌンマ（七杜の母）をインギョー（隠居）すると、家で大切に保管する。だが、本人が死んだ場合、祭祀用具を積極的に捨てることはせず、そのまま保管する。形見分けの材料とはならないが、記念品としてもらう人もいる。

だが、祭祀用具を焼き捨てたり、亡くなった本人の棺の中に入れることもしない。祭祀用具は穢れたものと弁別する。ここにもまた祭祀用具には神霊が宿っているという観念がみられるのである。

狩侯の拝所「ニシニヤームトゥ（西の家元）」に、神が用いたといわれるカンピチイ（神櫃）がある。朽ちてもそのままの状態で置いてある。西原の祭祀用具もそのような運命を辿るのであろうか。